天台大師の淨土教

——晩年の苦悶——

安藤俊雄

天台大師の講説したものと傳へられる觀無量壽經疏・淨土十疑論・阿彌陀經義記その他について眞僞の論が昔から盛に行はれた。いまは、これらの問題とは別に、大師の晩年の淨土信仰について述べたいと思ふ。

天台大師は開皇十七年十一月二十四日石城で示寂された。その終焉に當つて大師が深く淨土を思慕したことは、隋天台智者大師別傳や續高僧傳などの記錄によつて明瞭である。

然るに摩訶止觀に説くところの常行三昧の思想や、維摩經略疏の佛國品の註釋のところの論述は、いづれも天台大師の晩年の淨土教を知るべき重要な資料であるが、そこに見られる天台大師の淨土教思想と終焉の彌陀信仰との間には少なからざる相異や飛躍があるやうに見える。何となれば、第一に摩訶止觀について云へば、そこでは淨土教は四種三昧の一として説かれてはゐるが、大師の過去の思想傾向や、摩訶止觀の趣意から見て決して特に大師が淨土教に重大な關心を寄せたことを示してはゐない。（別に同學會紀要の「天台大師に於ける常坐三昧と非行非坐三昧」の中で、これについて言及したから、參照ありたし。）大師としては、四種三昧の中で、むしろ常坐三昧や非行坐三昧の方が重要であつたのである。また第二に、維摩經玄疏や維摩經略疏なども、大師が二度、三度と改訂を加へ、この仕事が摩訶止觀よりも後の大師の重要な目標であつたし、維摩經全體の「宗」を不思議佛國の因果であると規定せられたことによつて知られるやうに、大師にとつては維摩經の宗、すなはち要點は、不思議佛國、すなはち淨土の因果を説くところにあつたわけである。だから實際、大師は特に略疏の佛國品の註釋のところでは、淨土の因、果、種類などについて八段に亙つて詳細な研究を發表してゐる。ところが、この場合でも彌陀淨土は大師のいわゆる四種淨土のなかで、最低の淨土たる凡聖同居土であるとされた。かくの如く、摩訶止觀や維摩經玄疏及び略疏に見られる思想傾向といふものからは、到底、諸傳の傳へるやうな終焉のときの熱烈にして敬虔な淨土への思慕が生れやう筈はないのである。けだし大師は終焉に當つては、專ら西方往生を願ひ、彌陀觀音の來迎を期待したと傳へられるが、かうした熱烈な信仰と、晩年の大師の淨土教學との間には大きな距離があるからである。

然らば、天台大師は晩年に至つて教學と信仰との間に齟齬を生じたと見るべきか。それとも終焉のときの淨土信仰が歴史的事實ではなく、誰かゞ造り上げたと見るべきか。ところが、それが確實な歴史的事實であつたことは、國清百錄第六四所收の天台大師の發願文や、第六六王答遣旨文、第六七王遣使入天台建功德願文、及び第九三の天台國清寺智者禪師碑文などによつて確實であり明瞭でもある。これらはいづれも天台大師が生前及び臨終に西方往生を深く信じたことを明示してゐる。

然らば大師は何時頃から、また何が故に、終焉に當つて西方を思慕したのであらうか。國清百錄所收の重述還天台書を見る

に、そこでは大師が來世再び人間界に生れて、山谷に住み、成佛のための修行を成就したいと告白してゐる。これは晋王廣に天台山へ歸還の承認を求めた書簡ではあるが、當時の大師の心胸を卒直に表明してゐると思ふ。今生での修行や門人の指導に對する悲痛な絶望感は示されてはゐるが、まだそこには西方思慕の信仰は見られない。大師が西方を願生する轉機は、この書簡を書いた後、すなはち天台山へ歸還以後であつたのではなからうか。大師は開皇十五年、又は十六年に天台山へ歸山した。どちらにしても天台山では僅か二年ほど住まれただけで入寂されたのである。その天台山での或るとき、大師は色々の靈夢を見て、死期の近づいたことを門人智晞に告白したと別傳が記錄してゐる。ここで詳細を述べることはできないが、この頃から大師の西方思慕の心境が決定的なものとなつたにちがいない。もとより大師の淨土教の起源については、大師の少年時代の環境や、修學時代の慧思からの影響、あるひは大師の晩年に於ける廬山の滯在なども、大いに關係がある問題であるが、いづれにしても、最後に天台山で病床生活を送つておられる頃に、寶塔の崩壞や、慧思禪師が淨土往生を勸招されるのを夢見たといふ告白を詳細に記錄してゐる別傳の記事は頗る暗示深いものと思はれる。

それにしても、大師が何故、西方を思慕しなければならなかつたのか。これが最も重要な問題である。之れは晩年の大師の心底にうづいてゐた深刻な苦悶から生れたものである。簡單に云へば、自身の成佛のための修行を完成することが絶對に不可能であるといふ絶望感と、門人の指導についての悲痛極まる幻滅感とが、あの天台教學といふ理想主義の雄大教學の組織者たる大師をして、遂に西方彌陀の淨土を思慕せしめた重大な原因であつたのである。大師が死に臨んで、親交のあつた晋王廣に對する遺書を門人に口授した。その遺書の初頭で、大師はその生涯を回顧し、六根なるものを列擧してゐる。第一は大師が初發心のとき、上は無生法忍から、下は、せめて六根清淨の位に入るべく努力したが、遂に目的を果すことができなかつたといふ點である。第二恨以下第六恨までは、金陵、楊州、湘潭、荆州等で門人指導に努めたが、遂に傳法の候補者を見出すことができなかつた點を指摘してゐる。つまり自行及び化他の分面に亙つて、大師が深く絶望の底に落ちてゐたことを赤裸々に告白してゐるのである。これは大師にとつては恐るべき悲劇であつたにちがいない。なぜなれば、大師が初めて金陵に入つた三十歳以後の初期の金陵講說時代には、こうした暗い人生觀は少しもなく、明るい樂天的な理想主義の精神が盛であつた。例へば六妙法門などは、この初期に屬するものであるが、六妙門の圓觀といふ特別の修行方法に從えば、現生に於て無生法忍、すなはち初住以上の位に入ることは勿論、妙覺の位にさへ入れると斷言してゐる。だから若かりし天台大師としては、六根清淨の位、すなはち十信位に入ることなどは、少しも難事ではないと考へたに違ひない。中間期でも同樣である。小止觀や覺意三昧などは、色々の點から見て、この中間期に屬するものであるが、そこでは、やはり初住位に入ることは當然のこととして考へられてをり、初期と同樣に、大師自身が果して嚴肅に自己の行位を反省されたか、さういふ形跡は見受けられない。覺意三

昧の如きは瓔珞經の説をそのまま採用して、十住を內品、十信を外凡とし、まだ後年の五品弟子位の思想も形成されてゐないのである。初期及び中間期の大師の行位説は比較的單順であるし、この行位の系列に於ける大師自身の反省も、さほど深刻に行はれた形跡がない。然るに、いはゆる天台三大部などが講説された晩年になると、頗る大規模な行位體系が組織された。すなはち法華經の三草二木の比喩に據つて、下は人天から、二乘、通教、別教、及び圓教の行位を洩れなく網羅し、天台圓教の行位説の優越性を誇示するに到つた。しかもここで初めて五品弟子位を設け、圓教の行位を、五品弟子位、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の系列段階として示したのである。しかし晩年に大成された天台教學と雖も、やはり初期以來の理想主義を立場とし、さらにそれを擴充したものであるから教相門及び觀心門の全體系は、どこまでも圓教として説かれてをり、その限り、十信位に於て六根清淨を得、十住の第一、初住の位に入れば當然無生法忍を得るものとされ、この十信や十住の位には如實修行することによつて當然到達できるものとして説かれてゐる。生身得忍、すなはち現世に於て無生法忍を得るといふことは當然であるし、一生妙覺といふ如く、一生の中に妙覺位に達することも決して不可能ではないといふのである。三種止觀のうち、圓頓止觀を説く摩訶止觀は、圓頓速疾の頓悟禪を説くものであるから、もとより現生に於て證悟を得るのである。上根一法、中根七法、下根十法と云はるゝ如く、いくら下根の行人でも、十乘觀を修行すれば當然初住位に入るものとされてゐる。漸次止觀でも、圓教の止觀たる限り、圓理を離れて修行するわけではないから、一生の中に證悟できぬわけではない。だから生身得忍と一生妙覺といふことは、大師が組織し講説された教學に關する限り、初期、中期、後期を通じて、不變の立場であつた。しかしこれは教學の表面に關する限りのことであつて、最後の講説たる摩訶止觀には、さすがに大師自身の反省の跡が見られるふうである。例へば十乘觀法の中に、知次位といふ一種の課目を加へ、これを一つの觀法として制定したのも、增上慢と卑下慢を避けるためではあるが、そこに大師の精神が美しく高遠な教學理論よりも、まづ自己の精神的現實が眞に證悟の境地に達してゐるか否かといふ主體的な反省に關心を寄せるに至つたことを主證してゐるし、次第禪門など初期の思想に於ては、すべて證果報が現世に於て得られると説いてゐたのに、摩訶止觀になると、果報と華報とを區別して、圓教の修行者が初住から十地等の位に入つて得る報に、これら二種があり、現生で得る報は華報であつて、眞實の報たる果報は來世でなければ得られぬと説いてゐる。そこにも大師が初期や中期と異つて、頗る愼重な態度に轉換した形跡を見出すことができる。いづれにしても、かくの如く、はじめ南北朝時代の特に南地の涅槃學派の樂天的な人生觀に立脚した天台大師が、晩年に及んで自身の行位について嚴正な反省を加へることによつて、遂に臨終、自分の行位を五品弟子位と告白し、十信位以下の者が往生すべき西方淨土を思慕するに到つた精神過程のなかに、天台教學の限界內に於てゞはあつたが、天台大師の晩年の苦悶の跡をまざまざ見ることができるであらう。（詳細は近く大谷大學研究年報第十一集に發表の豫定である。）